サイン

年　組（　番）名前　　記入日　月　日

美帆 万能の女王

五輪新で金メダル

北京冬季五輪のスピードスケート女子1000メートルで、高木美帆（27）が金メダルに輝いた。前回の平昌大会での団体種目に続く2個目の金。五輪で獲得したメダルは今大会4個、通算では7個となり、日本女子の最多記録を塗りかえた。

抜群のスタートから加速すると、高木は呼吸も忘れたかのように飛ばした。「最後に自分の全てを出し切ることができた」。五輪新記録をマークし、何度も右腕を突き上げた。

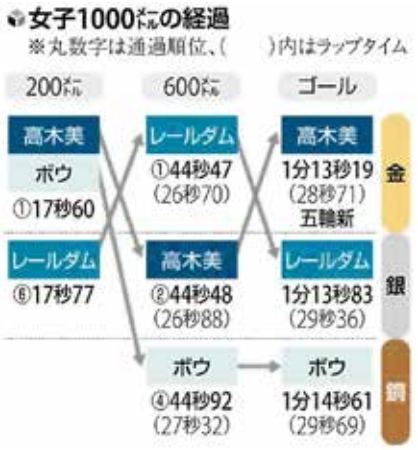
1000メートルの金メダルは日本勢で初。欧米選手に比べて小柄な日本選手は歩幅で及ばず、距離が長くなれば不利になる。過去の五輪で優勝した日本選手は、いずれも500メートルだった。

壁を乗り越えた要因は、巧みなスケーティング技術だ。ジュニア時代の指導者は「着地したときに氷との間の摩擦が少なく、前に進む。瞬間的に力を入れるのもうまい」と天性の能力を指摘する。1歩で進む距離が長い分、体力を消耗せず、1周400メートルのラップタイムが後半でも大きく落ちないという。

もちろん、高木は才能に甘えず、時間をかけて自身を「改造」した。

平昌五輪後の4年間で、スピード勝負の500メートルを強化する一方、長距離の3000メートルにも取り組んだ。専門種目を絞るよう促されても、多くの種目を滑ることで全てが速くなるという信念を抱いていた。

今大会は5種目、計7レースに臨んだ。距離も違えば、団体種目もあり、練習方法も異なる。ピークを合わせるのが容易でない中、3種目で銀メダル。唯一メダルに届かなかった300メートルでも6位入賞し、大舞台最後の出番で頂点に立った。全てで世界トップレベルの力を示し、挑戦が正しかったことを証明した。



（2022年2月18日　読売新聞朝刊より）

1 高木選手が五輪で獲得したメダルの数を表にまとめました。空欄にあてはまる数字を書きましょう。

	金	銀	銅
2018 平昌五輪			1
2022 北京五輪			

2 図「女子1000メートルの経過」は、文中のどのようなことを表していますか。最も適切なものを選び、番号を書きましょう。

① 高木選手は200、600メートルで金銀メダルを1つずつ獲得した事実

② 日本選手は欧米選手に比べ、距離が長くなれば不利になるという分析

③ 高木選手は後半でも大きくラップタイムが落ちない、という恩師の指摘

④ 抜群のスタートから加速し、最後までトップで逃げ切ったレース展開

3 傍線部「挑戦が正しかったことを証明した」とありますが、記者が「正しかった」と表現しているのは、高木選手のどのような考え方ですか。35～40字で抜き出しましょう。

35　40

©読売新聞社 2022年　無断複製・転載を禁じます

美帆 万能の女王

五輪新で金メダル

北京冬季五輪のスピードスケート女子1000メートルで、高木美帆（27）が金メダルに輝いた。前回の平昌大会での団体種目に続く2個目の金。五輪で獲得したメダルは今大会4個、通算では7個となり、日本女子の最多記録を塗りかえた。

抜群のスタートから加速すると、高木は呼吸も忘れたかのように飛ばした。「最後に自分の全てを出し切ることができた」。五輪新記録をマークし、何度も右腕を突き上げた。

1000メートルの金メダルは日本勢で初。欧米選手に比べて小柄な日本選手は歩幅で及ばず、距離が長くなれば不利になる。過去の五輪で優勝した日本選手は、いずれも500メートルだった。壁を乗り越えた要因は、巧みなスケーティング技術だ。ジュニア時代の指導者は「着地したときに氷との間の摩擦が少なく、前に進む。瞬間的に力を入れるのもうまい」と天性の能力を指摘する。1歩で進む距離が長い分、体力を消耗せず、1周400メートルのラップタイムが後半でも大きく落ちないという。

もちろん、高木は才能に甘えず、時間をかけて自身を「改造」した。

平昌五輪後の4年間で、スピード勝負の500メートルを強化する一方、長距離の3000メートルにも取り組んだ。専門種目を絞るよう促されても、多くの種目を滑ることで全てが速くなるという信念を抱いていた。

今大会は5種目、計7レースに臨んだ。距離も違えば、団体種目もあり、練習方法も異なる。ピークを合わせるのが容易でない中、3種目で銀メダル。唯一メダルに届かなかった3000メートルでも6位入賞し、大舞台最後の出番で頂点に立った。全てで世界トップレベルの力を示し、挑戦が正しかったことを証明した。

女子1000メートルの経過

※丸数字は通過順位、（　）内はラップタイム

200メートル	600メートル	ゴール	
高木美 ボウ ①17秒60	レールダム ①44秒47（26秒70）	高木美 1分13秒19（28秒71）五輪新	金
レールダム ⑥17秒77	高木美 ②44秒48（26秒88）	レールダム 1分13秒83（29秒36）	銀
	ボウ ④44秒92（27秒32）	ボウ 1分14秒61（29秒69）	銅

1 高木選手が五輪で獲得したメダルの数を表にまとめました。空欄にあてはまる数字を書きましょう。

	金	銀	銅
2018 平昌五輪	1	1	1
2022 北京五輪	1	3	0

「前回平昌大会での団体種目に続く２個目の金」から、金メダルは前回と今回で１つずつとわかります。後半に「３種目で銀メダル」とあるので今大会の銀メダルは３個ですね。残りは「今大会４個、通算７個」のヒントから埋まります。

図からは、高木選手のラップタイムが、ほかの選手と比べて落ちていないことがわかります。

2 図「女子1000メートルの経過」は、文中のどのようなことを表していますか。最も適切なものを選び、番号を書きましょう。

① 高木選手は200、600メートルで金銀メダルを1つずつ獲得した事実
② 日本選手は欧米選手に比べ、距離が長くなれば不利になるという分析
③ 高木選手は後半でも大きくラップタイムが落ちない、という恩師の指摘
④ 抜群のスタートから加速し、最後までトップで逃げ切ったレース展開

③

高木選手は、どのような考えを持って、多くの種目で結果を出したのか、を読み取りましょう。

3 傍線部「挑戦が正しかったことを証明した」とありますが、記者が「正しかった」と表現しているのは、高木選手のどのような考え方ですか。35～40字で抜き出しましょう。

専門種目を絞るよう促されても、多くの種目を滑ることで全てが速くなるという信念

35　40

©2013 そにしけんじ／読売新聞社

読んでみよう！

◆ミー太郎のおすすめ記事

平昌 2018

ソチ落選 甘い私変えた

ゴールすると天井を見上げ、両目をぎゅっと閉じた。充実感。その言葉に尽きる。この4年間の思い、全てがこもった1500㍍だった。

高木美が世に出たのは2010年バンクーバー五輪で、1500㍍は23位だった。その後はワールドカップ（W杯）に出続け、日本のトップスケーターの立場も板についてきた。だがそれは国内だけの話。国際大会では2桁順位の常連で、「スーパー中学生」と呼ばれた逸材は、伸び悩んだ。14年ソチ五輪シーズンの日体大1年当時の自己評価は「こなれた中堅選手」。当時指導していた青柳徹監督は驚いた。「こんなに勝利欲の低い子だったのか」

その秋のこと。国際大会で韓国選手が1000㍍で好記録を出した。「気合入ってんね」と仲間に言った何げない自分の言葉に、違和感を覚えた。五輪シーズンにもかかわらず、必死さがない。「もうちょっと熱くならないといけないんじゃないの」

不安は的中し、13年12月のソチ五輪代表選考会で代表落ちした。後悔する行動を取ってしまった自分自身の情けなさ、悔しさは、いまだにふとした瞬間に思い出すほど深く胸にささった。

だからこそ、「次があると思った時点で、甘えを自分に与えてしまう。平昌で最後だ、という気持ちでいかないと。同じことはしたくない」。あえてゴールを作った。4年間をスケートに懸ける自分へと変わるために。

その努力が銀メダルという形で表れた。それでも、1位まであとコンマ2秒と知ると涙が流れた。「金メダルを逃した悔しい思いが後からあふれてきた」。やり返す。また闘志がわいてきた。

（上田真央）

（２０１８年２月１３日
読売新聞朝刊より）

高木選手にとっては、４年前の悔しさも、金メダルの原動力だったのですね。

中学３年で五輪に初出場してから、１２年。

長いと感じますか。短いと感じますか。

©2013 そにしけんじ／読売新聞社